政大日本研究【第十四號】
2017 年 1 月，頁 19～40

從他界看日本人的死生觀
—以文學觀點試論

徐　翔生*

中文摘要

他界意指死後的世界，不同的文化有不同的詮釋。基督教中，他界是充滿愛與光明的美好天國，或是惡魔存在的恐懼煉獄；而佛教中的他界，則是沒有痛苦煩惱的極樂淨土，或是刑罰不斷重複的地獄世界。至於日本人對他界的看法如何？日本人他界觀和其信仰的神道與佛教有何關聯？神道與佛教對日本人的死生觀又有何具體影響？皆為探討日本人死生觀之重要課題。本論文聚焦各時代的文學經典名著，從文學作品中描繪之他界，探討日本人對死亡的獨特看法。其後再自日本文學中所見他界之變容，考察其中所蘊含的宗教要素，從他界的觀點論述日本人之死生觀。期藉拙論，對日本人的死生觀有更進一步之探究，進而對理解日本的宗教思想文化有所助益。

關鍵字：他界　死生觀　神道　佛教　現世導向　來世導向

* 國立政治大學日本語文學系教授

The Japanese Concept of Life and Death Revealed in the Idea of the Afterlife: From a Literary Point of View

HSU, Hsiang-Sheng *

Abstract

An afterlife means a world after death, and it is interpreted differently depending on cultures. In Christian world, the afterlife is portrayed as joyful paradise full of love and brightness, or inferno with demons; whereas in Buddhism the afterlife is depicted as Sukhavati or Hell. With regard to the Japanese, how do they think about the afterlife? What is the relevance between the Japanese idea of the afterlife and Shinto and Buddhism believed in by the Japanese? What do Shinto and Buddhism concretely influence the Japanese concept of life and death? These are important issues for discussing the Japanese concept of life and death. In this paper, the portraits of the afterlife in classic literary works in each period as examples, the unique Japanese idea of death is discussed. Subsequently, the religious elements contained in variations of the portraits of the afterlife in Japanese literature are examined and the Japanese concept of life and death is discussed from the point of view of the idea of the afterlife. This paper aims to clarify the Japanese concept of life and death further and to help understand Japanese religion, thought and culture.

Keywords: afterlife, the concept of life and death, Shinto, Buddhism, this-worldly orientation, orientation of hereafter

* Professor, Department of Japanese, National Chengchi University

他界像から見る日本人の死生観
—文学の観点からの試論

徐　翔生*

要旨

死後の世界、すなわち他界は、文化によって異なるものである。キリスト教では、他界は愛と明るさに満ちた美しい天国であるか、または悪魔がいる恐ろしい地獄である。これに対して、仏教の他界は苦難や煩悩のない極楽浄土であるか、または残酷な刑罰が反復される地獄となっている。それでは、日本人は他界についていったいどのように考えていたのか、その背後に如何なる宗教の要素があり、またそれが日本人の死生観にどのような影響を与えてきたのであろうか。本論では、他界を論じた各時代を代表する文学作品を焦点に、その中に表われている他界を述べながら、日本人の他界に対する独自の見方を論じてみる。それから日本文学に見られる他界がどのように変化したのかに論及し、他界に関する仏教と神道の観点から日本人の死生観について議論したい。この論文によって日本人の死生観への理解、及び日本の宗教思想文化研究に少しでも役に立つことができれば幸いである。

キーワード：他界　死生観　神道　仏教　現世志向　來世志向

*国立政治大学日本語学科教授

他界像から見る日本人の死生観
—文学の観点からの試論

徐　翔生

1. はじめに

死のことは、人間が理解しようと思っても理解しえないものであるが、人間が避けようと思っても避けられないものでもある。私たちは死後どこへ行くのか、死後の世界はまたどのようなあり様であろうか、これは人間が古来問い続けてきたことであり、人間が古くから大いに関心を持ってきたことでもある。この問題は洋の東西に関わらず、人間生活の中に最も深く浸透している問題でもある。もっとも死の捉え方は国によって異なるものである。死後の世界、すなわち他界は、時代や宗教などによってその現れ方もまたさまざまである。たとえばキリスト教では、他界は愛と明るさに満ちた美しい天国であるか、または悪魔がいる恐ろしい地獄である。これに対して、仏教の他界は苦難や煩悩のない極楽浄土であるか、または残酷な刑罰が反復される地獄となっている。それでは、日本人は他界についていったいどのように考えていたのか、その背後に如何なる宗教の要素があり、またそれが日本人の死生観にどのような影響を与えてきたのであろうか。

本論では、まず他界を論じた各時代を代表する文学作品を焦点に、その中に表われている他界を述べながら、日本人の他界がどのような形態をとってきたかを考えてみようと思う。次に日本文学に見られる他界がどのように変化したのかに論及し、日本人の他界に対する独自の見方を論じてみる。最後に、他界に関する宗教的観点から日本人の死生観について議論したい。日本では、古代・中世・近世、それぞれの観点から他界像に関する研究は見られるが[1]、古代から現

[1] 西郷信綱『古代人と死』（平凡社、1999 年）、五来重『日本人の地獄と極楽』（人文書院、1991 年）、高橋文博『近世の死生観』（ぺりかん社、2006 年）を

代までを見通した他界に関する研究はあまり見られない。また宗教学から行われた死生観の研究もそれほど多くない。拙論「日本人の死後の世界観―宗教からの試論」においては、仏と神が習合した神仏習合の観点から日本人の他界観を論じているが、取り上げた作品が限られていたので、十分に検討の余地を残す結果となった。またこれにより、仏教と神道が日本人の死生観にどのような影響を与えていたかについて、もう少し議論を深める必要性も出てきた[2]。この論文において、上述した拙論の研究成果を踏まえながら、より多くの文学作品を取り入れ、日本文学から捉えた他界像の変遷を考察しながら、改めて神道と仏教の観点から他界像から見る日本人の死生観を考えてみたいと思っている。この論文によって日本人の死生観への理解、及び日本の宗教思想文化研究に少しでも役に立つことができれば幸いである。

2. 古代文学に見られる他界

日本文学の中で、最も早く現われたのは『古事記』である。この本において、他界のことについてすでに言及されている。『古事記』の冒頭には、伊邪那岐と伊邪那美が天降りして、日本の国土及び神々の生成のことが語られている。ところが、伊邪那美が火神を生んだ時に火の災を受けて隠れ、黄泉国へ行くことになる。そして伊邪那岐が伊邪那美を慕って、「相見むと欲ひて、黄泉国に追ひ往きき」（上巻「黄泉国」）[3]と、黄泉国へ迎えに行くが、伊邪那美の姿を見て恐れて、再びこの世に戻るとなる。そこで、伊邪那岐は千引の石をもって黄泉国とこの現世の境界の入り口の黄泉比良坂を塞ぎ止めた。そのために、この現世と黄泉国は交通ができなくなったのである。

『日本書紀』には、以上述べた伊邪那岐が黄泉国を訪ねたことも書かれており、その大筋も『古事記』とほぼ同じである。ただ『日

参照。

[2] 徐翔生「日本人の死後の世界観―宗教からの試論」（『政大日本研究第 13 号』所収、国立政治大学、2016 年、49－69 頁）。

[3] 日本古典文学大系『古事記祝詞』（岩波書店、1958 年）63 頁。

本書紀』には、黄泉の国を「殯斂の處」(「一書第九」)[4]とも書かれている。かかる他界観は『古事記』『日本書紀』に限らず、『萬葉集』『懐風藻』などにも見られるところである。たとえば『萬葉集』には、「生けりとも　逢ふべくあれや　ししくしろ　黄泉に待たむ」(「巻九・一八〇九」)[5]という歌がある。この歌では、人間が死後往くべき場所は黄泉と描かれている。また『懐風藻』にも、「金烏西舎に臨らひ、鼓聲短命を催す。泉路賓主無し、此の夕家を離りて向かふ」(「大津皇子・臨終」)[6]という大津皇子の歌がある。この歌からも分かるように、死に赴くのはすなわち泉路を通って黄泉国へ往くことと考えられている。このような他界への捉え方は平安時代前期までの日本文学に見えている。

ところが、仏教の伝来によって日本人の世界観に影響を及ぼし、他界は黄泉から地獄、さらに極楽浄土へと移り変わっていく。『日本霊異記』は日本で最も古い唱導文学であるが、仏教が伝えられて二百年ほど後に作られたと記されている。この本に他界が黄泉、地獄とも書かれて、死んだ後に地獄をめぐって他界より甦ることが書かれている。「食広国黄泉に至り、善と悪との報を見て、顕し録して流布ふるなり」(「上巻・第三十」)[7]というように、仏教が当時完全に日本に受け入れられていないためか、地獄のことを黄泉の国とも称している。『日本霊異記』から約百年後に成った『往生要集』になると、黄泉という用語は見えなくなり、他界はすべて地獄や極楽浄土と表われている。

『往生要集』には、地獄と極楽浄土が如何なる世界かを解き明かし、地獄に関することが多く書かれている。この本では、仏教の教えに従わなかった人々が地獄で苦を受ける様子が鮮やかに描かれており、厭離穢土・欣求浄土という浄土思想が盛んにする一因をなした。『往生要集』を基として成った『日本往生極楽記』では、人々が

[4] 日本古典文学大系『日本書紀上』(岩波書店、1967 年) 98 頁。
[5] 新日本古典文学大系『萬葉集二』(岩波書店、2000 年) 399 頁。
[6] 日本古典文学大系『懐風藻』(岩波書店、1964 年) 77 頁。
[7] 新古典日本文学大系『日本霊異記』(岩波書店、1996 年) 47 頁。

極楽往生に至る話が多く収めている。『日本往生極楽記』以降現われた『続本朝往生伝』『拾遺往生伝』『後拾遺往生伝』などにも、人々が極楽浄土に往生したことが書き記されている。また『今昔物語』にも、極楽往生を果たした人のことが多く見られ、その巻十五には、往生の例が百以上も書かれている。以上のように、仏教の浄土信仰は平安時代後期より日本人の他界観に計り知れない影響を与えたことが窺える。

3. 中世文学に見られる他界

中世に入ると、仏教の影響がますます顕著になり、他界を地獄と極楽浄土とすることは、よりいっそう明らかである。以下、まず中世を代表する文学作品『平家物語』から見てみよう。

『平家物語』はその巻頭の名文「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響あり。娑羅双樹の花の色、盛者必衰のことはりをあらはす」(巻第一「祇園精舎)[8]に示されているように、仏教の無常観がこの作品全体を貫いている。この作品は以上の名文に合わせるかのように、平家がいかに勃興し、全盛時代に入り、そしていかに栄華から没落し、やがて破滅に至ったかが描かれている。実はこの作品の前半には、地獄の思想が見えており、平清盛は「南閻浮提金銅十六丈の盧遮那仏焼ほろぼしたまへる罪によッて、無間の底に堕給ふ」(巻第六「入道死去」)[9]とあるように、東大寺の大仏を焼き亡ぼした罪業によって、死後無間の地獄に堕ちて死んだという。『往生要集』によれば、この現世の下に八大地獄があるが、無間地獄は八大地獄の一番下にあり、第一地獄から第七地獄までのすべての苦痛がここにあるという[10]。そして「五逆罪を造り、因果を撥無し、大乗を誹謗し、四重を犯し、虚しく信施を食へる者、この中に堕つ」(巻上・大文第一「厭離穢土」)[11]というように、仏像を焼いた者はその罪で無間地獄に堕

[8] 新日本古典文学大系『平家物語上』(岩波書店、1991 年) 5 頁。
[9] 新日本古典文学大系『平家物語上』(岩波書店、1991 年) 345 頁。
[10] 日本思想大系『源信』(岩波書店、1970 年、11―29 頁) を参照。
[11] 日本思想大系『源信』(岩波書店、1970 年) 26 頁。

ちて行くという。

しかし『平家物語』には、地獄に堕ちることだけでなく、極楽浄土に往生しようとする者もよく描かれている。たとえば源頼政は極楽浄土のある西に向って、高らかに念仏を唱えながら、「埋木のはなさく事もなかりしに身のなるはてぞかなしかりける」(巻第四「宮御最期」)[12]という歌を残して自刃した。また平忠度は「西にむかひ、高声に十念唱へ、光明遍照十方世界、念仏衆生摂取不捨」巻第九「忠教最期」)[13]とあるように念仏し、極楽浄土に往生すると祈りながら、死の途についた。そしてこの作品の一番最後のところでは、建礼門院が「南無西方極楽世界、教主弥陀如來、かならず引摂し給へ」(灌頂巻「女院死去」)[14]とあるように念仏を唱えながら、極楽往生を遂げようとしたのであった。

以上のように、中世の日本人にとって他界はすでに黄泉から地獄と極楽浄土となり、しかもそれは遠い西方極楽浄土であった。このような他界への捉え方は『平家物語』に限らず、『平家物語』とほぼ同じ時代に成立した『発心集』にも見られている。『発心集』には、出家循世を志し、往生を願う者の話が多く書かれているが、「臨終正念ニテ、極楽ニ生レン事ヲネガヒ待レド、(中略)食物ヲ断テ、ヤスラカニヲハリナント思立テ待ル」(第三「書写山客僧、断食往生事」)[15]とあるように、隠遁生活に入った修行者は、断食によって往生できると思われている。このような西方浄土を思う心は、「山端に隠るゝ月をながむれば　われと心の西に入るかな」(中雑・八七〇)[16]という『山家集』の歌にも現われている。『新古今和歌集』には、西方浄土に往生する心も見えており、「つねよりもけふの煙のたよりにや　西をはるかにおもひやるらん」(巻二十・一九七三)[17]とあるように、西の浄土を思い、往生したいという心が窺える。このような

[12] 新日本古典文学大系『平家物語上』(岩波書店、1991 年) 247 頁。
[13] 新日本古典文学大系『平家物語下』(岩波書店、1993 年) 171 頁。
[14] 新日本古典文学大系『平家物語下』(岩波書店、1993 年) 408 頁。
[15] 大曾根章介・久保田淳『鴨長明全集』(貴重本刊行会、2000 年) 150 頁。
[16] 日本古典文学大系『山家集』(岩波書店、1975 年) 156 頁。
[17] 新日本古典文学大系『新古今和歌集』(岩波書店、1992 年) 574 頁。

他界への捉え方は、近世の日本文学にも引きつかれることになる。

4. 近世文学に見られる他界

近世の日本文学を考察するのに際しては、まず近世庶民が好んだ心中物から述べていきたいと思う。『曾根崎心中』は心中物の中で、最も代表的な作品だと言われている。この作品は徳兵衛とお初の心中を語っている。徳兵衛は主人から縁談話を持ちかけられていたが、遊女お初との恋を貫こうとするために、この縁談に取り合わなかった。結局徳兵衛は大坂から追放されることになり、お初との心中を選ぶことになる。そして二人は「七つの時が六つ鳴りて残る一つが今生の。鐘の響きの聞納め。寂滅為楽と響くなり」(「徳兵衛おはつ道行」)[18]という道行の名文が示された後、曾根崎天神の森へ向かい、死途に赴こうとする。それから二人は念仏を唱えながら、死の苦痛を経た後、はじめて「未来成仏疑ひなき恋の。手本となりにけり」（同上）[19]と、未来に成仏を遂げることを約束され、恋の手本となるほどに、二人が愛を貫徹したところで物語は終わる。

すでに相良亨によっても指摘されているように、『曾根崎心中』には一蓮托生の考え方が潜んでおり、厭離穢土・欣求浄土という仏教の理念に基づいて作られているという[20]。このような欣求浄土の思想は、以上述べた心中物だけでなく、近世の武士道文献にも見られている。『葉隠』は近世武士道文献を最も代表するものだとよく言われている。その冒頭に、死のことが次のように述べられている。「武士道と云は、死ぬ事と見付たり。二つ／＼の場にて、早く死方に片付ばかり也。別に子細なし。胸すわつて進也。（中略）毎朝毎夕、改めては死々、常住死身に成て居る時は、武道に自由を得、一生落度なく家職を仕課すべき也。」(『聞書一・二』) [21]

[18] 新日本古典文学大系『曾根崎心中』（岩波書店、1993 年）124 頁。
[19] 新日本古典文学大系『曾根崎心中』（岩波書店、1993 年）130 頁。
[20] 相良亨「日本人の死生観」(『相良亨著作集４』所収、ぺりかん社、1994 年、93 頁）を参照。
[21] 日本思想大系『葉隠』（岩波書店、1974 年）220 頁。

以上のように、武士道においては、武士たる者の心構えが説かれており、死の覚悟が強調されている。このような死の覺悟は、武士が戦場における死の覺悟とは異質なものであるが、戦争がない平和な近世において、武士が主君に忠を尽くし、名誉を保つのに最もよい方法と考えられた。そこで、この作品では殉死が奨励されており、「大名の御死去に、御供仕候者一人も無レ之候ては、さびしきものにて候。（中略）只擲さえすれば澄也」（『聞書一・十二』）[22]とあるように、ただ命を擲つことが高く評価されている。ここで死というものが美化され、死の神聖化を見て取ることができる。このような死の覺悟は、極楽浄土の世界への入り口として、一つの通過点とも考えられる。以上のように、近世の心中物『曾根崎心中』と武士道文献『葉隠』からは、近世日本人の死生観に仏教の強い影響があることが窺える。それと同時に、近世の日本人は中世の浄土信仰を継承して、他界を極楽浄土と捉え、死後その極楽浄土に往生できると信じていたことも理解できる。

しかし死後の極楽浄土を願うことは、近世の日本文学に共通して見られるのではない。近世の町人物には、仏教の要素が希薄化されていく傾向にあり、來世より現世の幸せを望む傾向が強くなっていく。たとえば『日本永代藏』では、子孫のために蓄財すべきことが次のように述べられている。「人間、長くみれば、朝をしらず、短くおもへば、夕におどろく。されば天地は万物の逆旅、光陰は百代の過客、浮世は夢曙といふ。時の間の煙、死すれば何ぞ、金銀、瓦石にはおとれり。黄泉の用に立がたし。然りといへども、残して子孫のためとはなりぬ。」（巻一「初午は乗ってくる仕合」）[23]。「人間、長くみれば、朝をしらず、短くおもへば、夕におどろく」という言葉から、仏教の無常観が窺える。また「浮世は夢曙」という浮世を夢幻とする考え方には、仏教の夢幻観を窺わせるものがある。ところが、金銀は「黄泉の用に立がたし」「残して子孫のためとはなり」

[22] 日本思想大系『葉隠』（岩波書店、1974 年）224 頁。
[23] 日本古典文学大系『西鶴集下』（岩波書店、1963 年）33 頁。

といった言葉にも示されているように、來世というよりも現世を大事にする思想が窺われる。このような現世を大事にし、現世利益を重じる考え方は、仏教思想とはかけ離れ、近世日本人が持った死生観のもう一つの側面とも考えられよう。このような傾向は時代が下るにつれ、より顕著になる。

5. 近現代文学に見られる他界

近現代以降の日本人の他界像に関する研究は、柳田國男の『先祖の話』が最も代表的なものとも言えよう。この本の中で、他界のことが次のように述べられている。「第一には死してもこの国の中に、霊は留まつて遠くへは行かぬと思つたこと、第二には顕幽二界の交通が繁く、単に春秋の定期の祭りだけで無しに、何れか一方のみの心ざしによつて、招き招かるゝことがさまで困難で無いやうに思つて居たこと。」（「死の親しさ」）[24]

柳田國男によれば、もとより日本人は死ぬと近くの山々に行くか、または近くの小さな島々へ行くと考えていた。ところが、現世の生活が豊かになるにつれて、死後に行く世界は山々と島々のかわりに、彼岸の国にあるあの世というところになった。われわれの死後霊はあの世へ行って神となり、お正月やお盆などの折々にまたこの世にやってくる。この世で供養を受けた後、再びあの世へ帰っていくという。そこで、柳田國男は「死してもこの国の中に、霊は留まつて遠くへは行かぬ」と言い、「顕幽二界の交通が繁」いとも述べている。また「日本人の死後の観念、即ち霊は永久にこの国土のうちに留まつて、さう遠方へは行つてしまはないといふ信仰が、恐らくは世の始めから、少なくとも今日まで、可なり根強くまだ持ち続けられて居る」（「先祖祭の観念」）[25]というように、これは日本人が古くから持ち続けた他界像であると柳田國男は述べている。

[24] 柳田國男『先祖の話』（『定本柳田國男集第十巻』所収、筑摩書房、1969 年）120 頁。
[25] 柳田國男『先祖の話』（『定本柳田國男集第十巻』所収、筑摩書房、1969 年）42 頁。

以上は『先祖の話』に見られる日本人が持っていたとする他界像である。以上のように、近代に入ってから日本人は他界を彼岸のあの世と捉え、死者に親しい感情を持っている。彼岸という言葉からも分かるように、このような他界像には、極楽浄土のイメージがあり、仏教思想と深い関わりを持っている。ところが、死後のあの世が彼岸の世界にあるにもかかわらず、「もとは死後の世界を近く親しく、何か其消息に通じて居るやうな気持を、抱いて居た」(「死の親しさ」)[26]とあるように、日本人は他界を現世が交流できる場所と考えており、他界であるあの世に親しい感情を持っているのである。このようなことから、近代以降の日本人が他界を身近なものと捉え、死者がいつまでも身近に留まるという観念を持っていることが窺えるのであるが、このような他界像は、他の近現代日本文学にも見られるところである。

たとえば夏目漱石の『こころ』では、主人公の先生は自殺という道を選ぶことをこのように述べている。「此の手紙が貴方の手に落ちる頃には、私はもう此世にはいないでしょう。とくに死んでいるでしょう」(「下・先生の遺書」)[27]、「死の道丈を自由に私のために開けて置くのです」(同上)[28]。以上のように、主人公は死に対する恐怖をまったく持たず、死に親しい感じを示している。このような死に関心があり、他界に対する親近感を持つことは、『こころ』に散見するところであるが、時代が下って現代の日本文学である村上春樹の『ノルウェーの森』にも同様のものが見られる。「死は生の対極としてではなく、その一部として存在している」(第二章)[29]、「生はこちら側にあり、死は向う側にある。僕はこちら側にいて、向う側にはいない。(中略)死は生の対極存在なんかではない」(同上)[30]といった言葉からも窺われるように、現代日本人は死という事実を認

[26] 柳田國男『先祖の話』(『定本柳田國男集第十巻』所収、筑摩書房、1969 年)120 頁。
[27] 夏目漱石『こころ』(『夏目漱石全集 7』所収、筑摩書房、1981 年)145 頁。
[28] 夏目漱石『こころ』(『夏目漱石全集 7』所収、筑摩書房、1981 年)143 頁。
[29] 村上春樹『ノルウェーの森・上』(講談社、1987 年)46 頁。
[30] 村上春樹『ノルウェーの森・上』(講談社、1987 年)46－47 頁。

めて、死を受け止めようとしている。以上のように、『ノルウェーの森』に見られる死の捉え方は、『先祖の話』に共通しているように見える。日本では、多くの学者は柳田国男の他界像が歴史を通じて持続していると述べているが[31]、本論においても、近現代日本人の他界像は『先祖の話』の延長線上にあることが確認できるところである。

6. 文学から捉えた他界の変遷

以上、古代から近現代までの日本文学を通して、その中に書かれている他界像を中心に、古代から現代に至るまでの他界像の歴史を展望してきた。これまで取り上げた文学作品からも分かるように、古代から現代まで、日本人は他界に関して様々な表現が用いてきた。『古事記』『萬葉集』『懐風藻』などからも分かるように、日本人は古くから死者の行く場所として黄泉が考えられた。黄泉は死者の行く場所であるが、伊邪那岐が黄泉の国へ行ったり来たりすることができるように、この現世と隔絶した他界ではなく、また別次元の超越的世界でもなかった。「黄泉に待たむ」「泉路賓主無し」といった言葉からも窺われるように、黄泉は人間が歩くことのできる場所にあり、この世を離れた遠い世界ではなかった。古代日本人はむしろ黄泉と隣り合わせに住んでいると考えていたのである。佐藤弘夫によれば、古代日本人は人間と死者が同じ世界を共有しており、黄泉がこの世に内在しており、人間の住む世界と次元を異にする場所とは考えられていなかったという[32]。このような他界への捉え方は、平安時代前期までの日本文学に見えている。

ところが、仏教の普及と伴って、平安時代後期より他界の様子が変わってくる。特に仏教の浄土信仰が浸透していくと、死後地獄に堕ちるか、または極楽浄土に往生するという観念が広まってくる。

[31] 梅原猛『日本人のあの世観』（中央公論社、1989 年、80－83 頁）、山折哲雄『日本人の死はどこにいったのか』（朝日新聞社、2008 年、213－214 頁）を参照。
[32] 佐藤弘夫『死者のゆくえ』（岩田書院、2008 年）48－49 頁。

『日本霊異記』からも窺われるように、仏教が伝来してまもなくの時、日本人は地獄を黄泉と称したことがあり、他界が黄泉と地獄を併用したことがあるが、その後、次第に黄泉の用例がなくなり、他界は一変して残酷な刑罰が反復される地獄となった。このような他界への捉え方は、『往生要素』にも明らかに見えている。そして浄土信仰の興隆によって、他界が地獄から極楽浄土へと移り変わり、人々は極楽浄土に往生するという願いが現われている。人々が極楽往生していったことは『日本往生極楽記』にも書き記されて、『続本朝往生伝』『拾遺往生伝』『後拾遺往生伝』などの往生伝にも見えている。

仏教が興隆した中世になると、他界が地獄と極楽浄土という捉え方はよりいっそう明らかである。中世を最も代表する『平家物語』では、死後恐れるべき地獄に堕ちるか、また美しい極楽浄土に往生するかについて書かれている。この作品において、他界はすでに身近な黄泉から遠い世界の地獄または極楽浄土へと変化している。『平家物語』には、極楽往生という願いがしばしば見え、浄土往生しようとする者は至るところに見い出すことができる。このような極楽浄土への希求は、『発心集』『山家集』などにも見えているが、『新古今和歌集』にも現われている。極楽浄土という他界への希求は、以上あげた中世の日本文学に限らず、近世の心中物『曾根崎心中』にも武士道文献『葉隠』にも見られている。以上のように、中世から近世までの日本文学には、仏教の強い影響を受け、その他界像は仏教の影響のもとに形成されたと考えられよう。

ところが、近世から近代に入ると、日本文学に見られる他界像は再び変動する。中世から近世まで広がった他界浄土の観念が薄まり、死後彼岸のあの世へ行くという観念が広まるのである。『先祖の話』にも書いてあるが、われわれが死後霊は彼岸のあの世へ行って、祭りなどを通してこの世に帰ったりする。以上のように、近現代の日本人は死者と生者が交流できると考えており、あの世とこの世が自由に往復することができる場所だと考えていた。ここで日本人の他界観に再び変化が見え、近現代日本人にとって他界は、地獄と極楽

浄土のような遠い世界から、この世の近くにある交通できる場所へと変容したと言わなければならない。では、何故古代から現代までの日本人の他界観に、このような変容があったのか、その背後に如何なる宗教上の意味があるのであろうか。

7. 他界像から窺える神道と仏教

言うまでもなく、他界が地獄と極楽浄土という捉え方は仏教と関連があり、仏教の世界観と深く関わっている。仏教は來世主義を説き、この世とまったく別次元の空間に他界を想定し、日本に明確な他界の概念をもたらしたとも言える。前節にも述べたが、『古事記』『萬葉集』『懐風藻』などからも窺えるように、日本人は仏教が入る前に他界を黄泉と捉えた。しかし黄泉がどのような他界であるか、作品では十分に描写されていないので、日本人はもとより他界について明確なイメージを持っていなかったと考えられる。ところが、仏教は地獄と極楽浄土という他界を説き、日本人が死後行く他界のイメージを具現化して見せた。仏教と日本人の他界観については、すでに多くの学者によって論じられているので[33]、これ以上論じることはしない。ここで注目すべきなのは、日本人は仏教が入る前に黄泉を他界と考えていたが、近現代に入ってから他界を彼岸のあの世に見立てた、ということである。このような他界観にいったいどんな宗教上の意味があるのか、またそれが日本人の他界像にどのような関連があるのであろうか。まず黄泉から考えてみよう。

実は拙論「日本人の死後の世界観―宗教からの試論」にも書かれているが、本居宣長をはじめ、津田左右吉、和辻哲郎をも含めて多くの学者は仏教が伝来する前に、日本には民俗信仰としての神道があり、古代の日本宗教が神道であると考えていた[34]。以下、本居宣

[33] 五来重『日本人の地獄と極楽』(人文書院、1991 年)、笠原一男『日本史にみる地獄と極楽』(日本放送出版会、1976 年)、梅原猛『日本人のあの世観』(中央公論社、1989 年) を参照。

[34] 本居宣長『玉勝間』(『本居宣長全集第一巻』所収、筑摩書房、1968 年、440 頁)、津田左右吉『日本の神道』(『津田左右吉全集第九巻』所収、岩波書店、1964 年、1－3 頁)、和辻哲郎『日本古代文化』(『和辻哲郎全集第三巻』所収、

長の解釈を援用しながら、何故古代日本人は他界を黄泉と捉えたかについて述べてみたい。

本居宣長によれば、人間の生と死は神のしわざによるものであるが、生は「産巣日大御神の産霊」(『古事記伝』三之巻「神代一之巻」)[35]によって生まれるが、死は「泉神の御作為」(『古事記伝』六之巻「神代四之巻」)[36]であるという。そしてこの世の人は死ねば、「貴きも賤きも善も悪も、死ぬればみな此夜見国に往こと」(同書・同上」)[37]というように、皆黄泉国に行くものであるという。「此身はなきからとなりて、しるく顕国に留在れば、夜見国には魂の往なるべし」(「同書・同上」)[38]とあるように、死後の霊が黄泉の国へ行くという。人間が死ねば黄泉の国へ行かなくてはならないことになっているから、人間はこの事実を受けとめる以外にない。古代日本人はこのことを肯定したから、そこには安心があった。「神道の此安心は、人は死候へば、善人も悪人もおしなべて、皆よみの国へ行事」(『答問録』)[39]と、本居宣長が説いている。これはすなわち「真実の神道の安心」(同書)[40]であるという。

ところが、本居宣長は死後の霊が黄泉へ行くことを説いているが、霊の行方や霊の働きなどについては説いていない。そこで、本居宣長の思想を継承した平田篤胤は、「此国土の人の死て、その魂の行方は、何処ぞと云ふに、常磐にこの国土に居る」(『霊の真柱・下巻』)[41]と、死後の霊がこの国土に留まっていること、また「人のこれを

岩波書店、1962 年、275－279 頁）を参照。

[35] 本居宣長『古事記伝』（『本居宣長全集第九巻』所収、筑摩書房、1968 年）129 頁。

[36] 本居宣長『古事記伝』（『本居宣長全集第九巻』所収、筑摩書房、1968 年）257 頁。

[37] 本居宣長『古事記伝』（『本居宣長全集第九巻』所収、筑摩書房、1968 年）239 頁。

[38] 本居宣長『古事記伝』（『本居宣長全集第九巻』所収、筑摩書房、1968 年）238 頁。

[39] 本居宣長『答問録』(『本居宣長全集第一巻』所収、筑摩書房、1968 年）526 頁。

[40] 本居宣長『答問録』(『本居宣長全集第一巻』所収、筑摩書房、1968 年）526 頁。

[41] 平田篤胤『霊の真柱』(日本思想大系『平田篤胤』所収、岩波書店、1973 年）108 頁。

祭れば、来り歆ること在儘に心得居りて」(『新鬼神論』)[42]というように、死後の霊がこの世に帰って来ることなどを語っている。さらに、『先祖の話』では、「霊は留まつて遠くへは行かぬ」こと、「顕幽二界の交通が繁」いことが書かれている。以上述べたことからも分かるように、『先祖の話』に書かれている霊と他界のことは、平田篤胤の思想に共通して見えている。日本では、柳田國男は本居宣長の影響を受け育った人だとよく言われている[43]。しかし『先祖の話』に見られる他界と霊に対する見方を眺めてみると、柳田國男の他界像は本居宣長よりも、平田篤胤との繋がりを重視すべきだろう。

しかし、本居宣長にせよ、平田篤胤にせよ、いずれも神道の学者で、古学神道を説いている。たとえ二人が霊の働きについての見方が異なっても、死後黄泉の国へ行くこと、死後の霊が実在するという見方は共通している。周知のように、神道では他界のことがあまり説かれないが、人間が死後霊となることが説かれている。霊のことは『古事記』に見られないが、『萬葉集』などに見えている。「家離りいます我妹を留めかね山隠しつれ心どもなし」)(「巻三・四七一」)[44]という歌にも示されているように、死者の魂が山に登って行くと考えられていた。以上のように、柳田國男はむしろ古学神道が説く死後観を仏教の極楽浄土のイメージと繋ぎ合わせて、その独自の他界観を確立したと言える。このように考えてみれば、近代以降日本人の他界観には、神道の思想が潜んでおり、神道の他界観と霊魂観も入っていると言わなければならないであろう。

8. 神道と仏教から見た日本人の死生観

以上、日本文学に見られる他界像の変遷を概観するとともに、その背後にある宗教的意義について探った。これまで述べてきたように、日本人は仏教が伝来する前に他界を黄泉と考えていたが、その

[42] 平田篤胤『新鬼神論』(日本思想大系『平田篤胤』所収、岩波書店、1973 年)168 頁。
[43] 安蘇谷正彦『神道の生死観』(ぺりかん社、1989 年、321－322 頁)を参照。
[44] 新日本古典文学大系『萬葉集一』(岩波書店、1999 年)292 頁。

他界像は固有信仰の神道と関わっている。そして平安時代に入ってから他界に仏教の浄土思想と結びつき、他界を地獄と極楽浄土と考えるようになった。このような他界への捉え方は、中世の日本文学にも近世の日本文学にも見えている。近現代に入ってから、日本人は他界を彼岸のあの世と考えているが、その他界観は仏教の世界観と神道の霊魂観の影響のもとにあった。以上のように、古代から近世までの日本人の他界観は、それぞれ神道・仏教の影響を強く受けていたが、近代以降日本人の他界観は、仏教と神道からも多大な影響を受けていたことが窺える。それにもかかわらず、平安時代後期から近世までの日本文学は、仏教の影響を深く受けていた。日本人が思い描く極楽浄土と地獄は、今なお代表的な他界像と言ってもよいであろう。

そして仏教の影響によって、日本人の他界観にも変化が見え、浄土信仰の影響を強く受けた日本人は、極楽浄土という他界に関心を持つようになった。それと同時に、日本人の死生観は來世志向性を帯びるようになり、現世志向から来世志向へと展開するように見える。周知のように、仏教では現世を仮の世界と捉え、現世より來世の幸せを望むという來世志向が強い傾向がある。仏教にはいろいろな教派があり、それぞれの教義も異なっているが、現世を否定的に捉え、死後の救済を最終的な目標とすることとも言える。このような來世志向的な意識は仏教の各宗派において共通して見えており、仏教の死生観の一つの特徴とも考えられる。前節に述べた平安後期に現われた『日本往生極楽記』『続本朝往生伝』『拾遺往生伝』などの往生伝には、極楽浄土への往生を願う話が多く収められている。このような極楽往生を願う心は、中世を代表する『平家物語』にも見えており、『発心集』『山家集』『新古今和歌集』などにも見られている。強い浄土志向は、近世の武士道文献『葉隠』にも見えており、心中物の『曾根崎心中』にも現われている。以上のように、中世から近世まで日本人の他界像は、仏教から強い影響を受けていたが、それが日本人の死生観にも変容を加えたので、日本人は來世志向的

な死生観となったのである。

ところが、時代の変遷に伴って、日本人の他界観に再び変容があり、その死生観は來世志向から現世志向へと変わるように見える。『日本永代藏』からも分かるように、近世になって仏教の影響力が弱まったところもあり、現世主義の傾向が見られるようになった。『先祖の話』からも窺われるように、近代に入ってからそれまで強まっていた來世志向的な死生観が弱くなり、日本人は来世よりも現世に関心を持つようになってきた。島薗進によれば、近代に入ってからキリスト教が入り、また仏教に代わって現世利益を強調する新興宗教が人々の支持を集めるようになった。これらの宗教が日本人の死生観にも影響を及ぼし、近現代日本人の死生観は來世志向から現世志向へと変わるようになったという[45]。

確かに島薗進によっても指摘されているように、キリスト教と新興宗教が近現代の日本社会に大きな影響を与えており、そのことを無視してはいけいと思う。ところが、本論で取り上げた日本文学は、キリスト教と新興宗教との関わりがあまり見られないので、ここでは直接の問題とはしない。ここで注意すべきなのは、前節にも述べたが、近現代日本人の他界像には、神道の思想が入っており、神道的な死生観が潜んでいる、ということである。実は神道には、現世的な一面があり、仏教の來世志向的な側面はあまり見られないのである。前節で述べたことからも分かるように、神道では仏教が主張するように、生前の行いによって死後地獄に堕ちるとか、極楽浄土に往生するとか、といった世界観は見られないが、この世の人が死ねば皆黄泉へ行くことが説かれている。また神道によれば、死者の霊はいつも身近な場所に留まり、現世の人々と交流することができるという。以上のように、神道では來世に対する期待も見られないし、来世主義的世界観も見られない。このような現世を中心にする思想は、現世志向ではないかと思う。

[45] 島薗進『シリーズ日本人と宗教・第三巻生と死』(春秋社、2015 年) 4－5 頁。

9. おわりに

本論では、古代から近現代までの日本文学を取り上げ、その中に見られる他界を考察しながら、日本人は他界を如何なるものとして捉えていたのか、それが時代とともにいかに変化していったのか、その背後に如何なる宗教の要素があるのか、それが日本人の死生観にどのような影響を与えていたのかという問題を明らかにしてきた。以上述べてきたように、他界は時代によっていろいろな形があり、宗教によってその現われ方も異なっている。そして平安時代から近世までの日本文学には、仏教の思想が貫かれており、仏教の世界観が日本人の他界観にも大きな影響を及ぼしたので、極楽往生という浄土志向が現われ、日本人の死生観は來世志向へと展開してきたのである。ところが、近現代に入ると、仏教の影響が弱まって、神道的な死生観が現われるようになった。特に神道の説く他界観と霊魂観が人々に安心をもたらしたので、日本人は來世志向的な死生観から現世志向的な死生観へと再び変化したのである。そのために、近現代日本文学においては、浄土志向が次第に見えなくなり、すべてこの現世を中心に書かれるようになるのである。

もっともどこの国でもその伝統的な宗教があり、その独自の他界観がある。したがって他の国から外来宗教が入ってくる時、その固有の他界観との妥協、あるいは習合がおこる。またそれが定着するためには、かなりの変容があったものと考えなければならない。本論で論じてきたように、日本人は仏教が入る前に、固有信仰の神道に基いて他界を黄泉と捉えたが、仏教が受容されてから他界を地獄と極楽浄土と捉えるようになった。近代に入ってから仏教と神道が習合して、仏教の極楽浄土の観念を変容させながら、神道の霊魂観を合わせて、死後彼岸のあの世へ行くという観念が生まれてくるのである。したがって、古代から近現代までの日本文学には、他界が黄泉だったり、地獄または極楽浄土だったり、彼岸のあの世だったりする。以上のように、日本人の他界観は仏教と神道から強い影響を受けており、そのもとに存立できたと考えられる。

実は文学作品は時代の鏡とも言え、現実の世相を反映している。その中に宗教的な要素が入って、人々の宗教意識が醸成される。本論で取り上げた日本文学に描かれている他界は、日本人が死や死後の世界についてのイメージとも言え、日本人の心にある宗教意識を伝えると同時に、日本人の死生観を表わすものとも考えられる。また日本文学に見られる他界の変遷は、その時代の宗教を反映するとともに、日本人の死生観の変化を描くものとも見なされている。たとえ時代の進歩によって、伝統宗教はその影響力を弱めていくが、仏教と神道はなお文学作品などを通じて、現代日本人の死生観にも影響を与えている。ただ時代の進歩によって、現代日本人は他界に関心を寄せるよりも、現世の生を大切にし、現世のみに関心を寄せるようになった。しかしこのような現世志向の背後に、仏教と神道の思想が入っていると思われる。つまり本論で論じた死に関心があり、他界に親近感を持つという宗教的な信念は、文学作品を通しながら、歴史的変遷を経ながらも、今日でも日本人の心に深く隠れ潜んでおり、今なお日本人の死生観に強い影響を及ぼしているのではないであろうか。

参考文献

安蘇谷正彦（1989)『神道の生死観』東京：ぺりかん社
安蘇谷正彦（1994)『神道思想の形成』東京：ぺりかん社
笠原一男（1976)『日本史にみる地獄と極楽』東京：日本放送出版会
金　永晃（2008)『仏教の死生観と基礎信仰』東京：勉誠社
神野志隆光（1986)『古事記の世界観』東京：吉川弘文館
五来　重（1991)『日本人の地獄と極楽』京都：人文書院
西郷信綱（1999)『古代人と死』東京：平凡社
相良　亨（1984)『日本人の死生観』東京：ぺりかん社
佐藤弘夫（2003)『霊場の思想』東京：吉川弘文館
佐藤弘夫（2008)『死者のゆくえ』東京：岩田書院

島薗　進・竹内整一（2012)『死生学』東京：東京大学出版会
島薗　進（2015)『シリーズ日本人と宗教・第三巻生と死』東京：春秋社
島薗　進（2016)『宗教を物語でほどく』東京：日本放送出版会
末木文美士（2010)『日本仏教の礎』東京：佼成出版社
高島元洋（2000)『日本人の感情』東京：ぺりかん社
高橋文博（2006)『近世の死生観』東京：ぺりかん社
立川昭二（1998)『日本人の死生観』東京：筑摩書房
林　　望（2000)『往生の物語』東京：集英社
久野　昭（1997)『日本人の他界観』東京：吉川弘文館
山折哲雄・島田裕巳（2008)『日本人の死はどこにいったのか』東京：朝日新聞社